

<b>H002</b>	<b>人文学入門（常識を疑う 日常に隠れたメディア・コミュニケーション）</b>		
英名科目名	An Introduction to Humanities : Modern Society and Media Communication		
大学名	京都大学		
連絡先	文学研究科教務掛 TEL:075-753-2809 FAX:075-753-2719		
担当教員	文学研究科 准教授 児玉聡 大阪大学 言語文化研究科 植田尚樹 文学研究科 非常勤講師 藏口佳奈 大阪府立大学・椋山女子園大学 非常勤講師 白木正俊 文学研究科 非常勤講師 長岡徹郎 国立国語研究所 林由華 文学研究科 研修員 TOJIRAKARN, Mashima 文学研究科 非常勤講師 満原健		
開講期間	2017年09月26日(火)～2018年01月16日(火) 5講時 16時20分～17時50分（毎週火曜日）		
開講形態	後期・秋学期	開講曜日・講時	火曜日 5講時
単位数	2	履修年次	1-4回生
会場	キャンパスプラザ京都		
授業定員	30		
単位互換生定員	30	京カレッジ生定員	
試験・評価方法	平常点60点+レポート40点 （ただし、2/3以上の出席がない場合は評価の対象としない。）		
超過時の選考方法	最大60名まで受講可能の見込み。先着順。		
受講料			
別途負担費用	なし		
その他特記事項	なし		
パッケージ科目			
低回生受講推奨科目			
<b>講義概要・到達目標</b>			
<b>授業の概要・目的</b> 本授業は、京都大学で学んできた新進気鋭の若手研究者がリレー形式で担当する。 現代日本、とりわけ京都で大学生活を送る私たちは、日常において異文化と触れ合う機会も多いが、自分たち、あるいは他者の文化や社会をどのように認識しているだろうか。自分が目にした日常世界がすべてだと思いついてはいないだろうか。 本授業では、日常に隠れた「メディア・コミュニケーション」に目を向けることで、私たちの「常識」を疑うことから始める。「メディア・コミュニケーション」の意味するところは、単に「テレビやSNSを通じて情報をやり取りすること」にとどまらない。私たちが言語や身体など無数の「メディア（媒体）」を通して世界を認識していること、そして日常のありとあらゆる場面で「コミュニケーション（伝達機構）」が機能していることを、歴史学や哲学、心理学、言語学などの観点から広く学ぶ。普段とは異なる観点から物事を見る目を養い、日常世界を捉え直すことが、本授業の主たる目的である。また、学生による発表や質疑応答、ディスカッションなどのアクティブ・ラーニングを活用することで、新しい視点を取り入れ、主体的に考え、課題を発見し、課題に共同で取り組む力も身に付ける。			
<b>到達目標</b> ・自分たちの文化や社会を相対化し、より広い視野と深い洞察力を持って、現実の諸問題に対する解決策を模索できる主体となる。 ・学問的な知識や主体的な学びの方法を身に付けると同時に、実際の課題に積極的に取り組む「生きる力」を涵養する。			
<b>講義スケジュール</b>			
[1] イントロダクション(植田)			
「思い込み」に気づく マンガの事例から考える(トジラカーン)			
[2] 「あさきゆめみし」の事例にみる現代人の「思い込み」			

[3] 「思い込み」はいかにして拡散していくのか 「クローズアップ現代+」の事例から	
哲学的メディア論(満原)	
[4] 言語というメディア	
[5] 身体というメディア	
琉球諸語とその記録・保存(林)	
[6] 世界の言語の現状と琉球諸語	
[7] 危機言語の記録・保存	
他者に抱く印象と身体との相互作用(藏口)	
[8] 他者の印象はどのように形成されるのか 実験心理学的アプローチから(1)	
[9] 他者の印象はどのように形成されるのか 実験心理学的アプローチから(2)	
日常に隠れた人間と水の関係史(白木)	
[10] 歴史的視点で人間と水との関係を考える	
[11] 鴨川を事例に人間と水との関係史を考える	
人と自然をつなぐ(長岡)	
[12] 人と自然との断絶 - 科学的立場の長所と短所	
[13] 人と自然との未来に向けて - 自然との共存は可能か? 東洋的立場から考える	
[14] レポートの書き方(林)	
[15] まとめ(植田)	
教科書	授業中に指示する。
参考書	授業中に紹介する。